## 機械学習

# 「第1章:線形回帰モデル」

### 線形回帰

- ・未知の値を予測する教師ありの回帰手法
- ・モデルのパラメータは重みが大きければ、その特徴量は予測に大きく影響
- ・直線 (e.g. y = wx +b) でデータを近似したもの
- ・入力が多次元ベクトルでも出力は1次元になる
- ・未知パラメータ(切片、回帰係数)の推定は最小二乗法を使用 \*最尤法でも同じ結果が得られる。
- ・線形単回帰(m=1)では、与えられたx,yのデータの個数分の連立方程式を解くことで未知パラメータの値が求められるが、計算の簡略化のため式を行列で表現する。
- ・線形重回帰(m=n次元)では回帰係数wがn個になる

## データ分割

・データを分割して、例えば80%を学習に20%をモデルの検証に使用する

## パラメータ推定

- ・平均二乗誤差(MAE)の値が小さいほど予測が正しい
- ・平均二乗誤差の勾配=0を求めるのが最小二乗法

## ハンズオン(scikit-learn)

1次元もn次元も同じロジック

import LinearRegression ライブラリインポート

model = LinearRegression()

model.fit(data, target) パラメータ推定、学習

model.predict([[1]]) 予測

```
Phi = polynomial_features(x_train)
pinv = np.dot(np.linalg.inv(np.dot(Phi.T, Phi)), Phi.T)
w = np.dot(pinv, y_train)
```

・ライブラリなし

## 線形単回帰:

```
cov = np.cov(x_train, y_train, ddof=0) ...xとyの共分散
```

a = cov[0, 1] / cov[0, 0] ....回帰係数 = xyの共分散 ÷ xの分散

b = np.mean(y train) - a \* np.mean(x train) ...切片 = yの平均 - 回帰係数 x xの平均

## 線形重回帰:

```
def polynomial_features(x, degree=3):
    X = np.ones((len(x), degree+1))
    X_t = X.T
    for i in range(1, degree+1):
        X_t[i] = X_t[i-1] * x
    return X_t.T
```

## 「第2章:非線形回帰モデル」

- ・線形で捉えられない場合、非線形を考える
- ・基底関数(多項式、ガウス型基底 etc.)を選定。パラメータの推定は最小二乗法や最尤法を用いる
- ・未学習、過学習が起こるが、過学習は正則化で回避

#### 正則化

- ・複雑なモデルの場合、複雑さに伴ってペナルティ項を大きくする
- ・L1ノルムを利用したLasso推定量とL2ノルムを利用したRidge推定量がある

#### モデルの評価と選択

- ・ホールドアウト法:データを学習用とテスト用に分割し、予測精度や誤謬率を推定する 訓練誤差とテスト誤差のMSEを比較して性能評価
- ・クロスバリデーション:ホールドアウト法に比べ、データが少ない場合に有効 データをm個に分割してm-1個までを学習に使用し、残りの1個をでモデルのテストをする クロスバリデーションの値が小さいモデルが良いモデルとなる

#### ハンズオン

クロスバリデーションはscikit-learnの「from sklearn.metrics import confusion\_matrix」を使用

## 「第3章:ロジスティック回帰モデル」

- ・教師あり学習、分類
- ・入力はm次元で、パラメータと線形結合し(線形回帰と同じ)、シグモイド関数にかけて四捨五入で 0 or 1を出力する
- ・シグモイド関数:0~1の値をを出力、シグモイド関数の微分はシグモイド関数で表現可能

### 最尤推定

- ・データを固定してパラメータを変化させパラメータの分布が特定の値であることがどれほどあるか
- ・尤度関数:xを与えた時Y=1になる確率、尤度関数を最大にするパラメータを推定
- ・複数のxに対しY=1になる確率を求めて掛け算し同時確率を求める
- ・尤度関数の微分は小数点以下が膨大になり計算が難しいので、対数尤度で対数同士の足し算、掛け算 にする。計算を楽にするため、対数尤度関数にマイナスをかけて最小化を目指す。

#### 勾配下降法

- ・対数尤度関数をパラメータで微分して 0 になる値を求めるのは解析学的に困難なので、最急下降法を使用する。学習率を設定する。
- ・確率的勾配法

最急下降法はすべてのパラメータに対し計算するので、データが多いと時間とメモリをくってしまう データを一つづつランダムに選んでパラメータを更新していく。ただし勾配=0になることは稀。

・ミニバッチ確率的勾配法

データを区切ってパラメータの更新に使用する。50から100に区切ることが多い。

## 分類モデルの評価

#### Confusion Matrix:

- ・正解率…分類したいクラスに偏りがあると正解率はあまり意味がない
- ・適合率…見逃しが多くてもより正確な予測をしたい場合

## ハンズオン(scikit-learn)

model = LogisticRegression()

model.fit(data, label) 学習 model.predict(data) 予測

model.predict\_proba(data) 確率表示

#### ライブラリなし:

def sigmoid(x):

return 1 / (1 + np.exp(-x)) ...シグモイド関数

X\_train = add\_one(x\_train) ...学習データセット

max\_iter=100...学習回数の設定eta = 0.01...学習率の設定

w = np.zeros(X\_train.shape[1]) ... 0 で配列初期化、Xと同じ形に

for \_ in range(max\_iter):

 $w_prev = np.copy(w)$ 

sigma = sigmoid(np.dot(X\_train, w)) ...確率算出 grad = np.dot(X\_train.T, (sigma - y\_train)) ...勾配算出

w -= eta \* grad ...パラメータ更新

if np.allclose(w, w\_prev):
 break

## 「第4章:主成分分析」

- ・大きい次元数のデータを情報量を保ちながら低次元に変換する、情報の質を落とさないための手法
- ・分散が最大(=0)になる軸を探す。分散共分散行列が対称行列なので、軸はすべて直行する
- ・手法:分散共分散行列の最大固有値に対応する固有ベクトルを求める
- ・n個のデータを係数ベクトルを用いて線形変換する
- ・寄与率:主成分分析で情報を圧縮したときに、どれくらい情報を保持または損失しているかの指標
- ・累積寄与率:現場でよく使用。それぞれの寄与率を累積する

### ハンズオン

## n\_components=2

mean = X.mean(axis=0) ...確率変数の平均

cov = np.dot((X - mean).T, X - mean) / (len(X) - 1) ...共分散

eigenvalues, eigenvectors = np.linalg.eigh(cov) ...共分散の固有値、固有ベクトルを求める

W = eigenvectors[:, -n\_components:]

principal\_components = W.T[::-1]

# 「第5章:アルゴリズム」

k近傍法(kNN)

- ・教師あり学習、分類。高次元データには向かない
- ・k個のクラスラベルの中で、最も近いラベルを割り当てる。ラベルを増やすと決定境界線が滑らかに
- ・最近傍法はk-nn1のk=0と同じ
- 実装:

## k平均法(k-means)

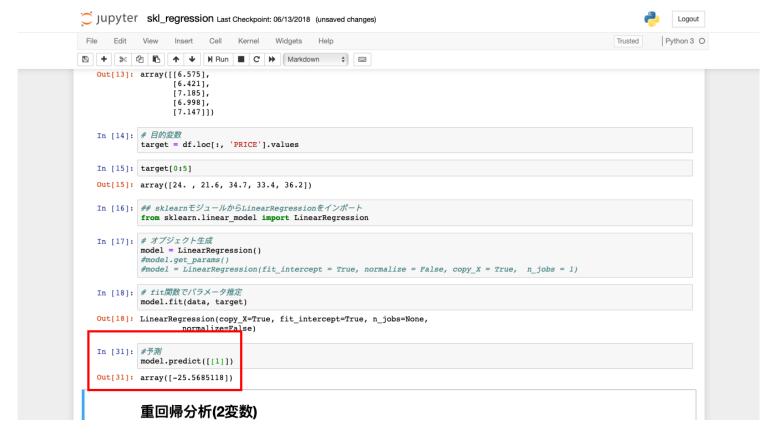
- ・教師なし学習、クラスタリング
- ・手法:
  - (1) クラスタ中心点の初期値をk個割り当て
  - (2) 各データがどの中心点に最も近いか計算し割り当てる
  - (3) 各クラスタの平均の中心点を計算
  - (4) 収束するまで
- ・実装:

```
def distance(x1, x2):
      return np.sum((x1 - x2)^{**}2, axis=1)
X_{train} = x_{train}
n clusters = 3
iter max = 100
# 各クラスタ中心をランダムに初期化
centers = X train[np.random.choice(len(X train), n clusters, replace=False)]
for _ in range(iter_max):
      prev_centers = np.copy(centers)
      D = np.zeros((len(X train), n clusters))
# 各データ点に対して、各クラスタ中心との距離を計算
for i, x in enumerate(X_train):
      D[i] = distance(x, centers)
#各データ点に、最も距離が近いクラスタを割り当
                                                 ...最小要素のインデックスを取得
cluster_index = np.argmin(D, axis=1)
# 各クラスタの中心を計算
```

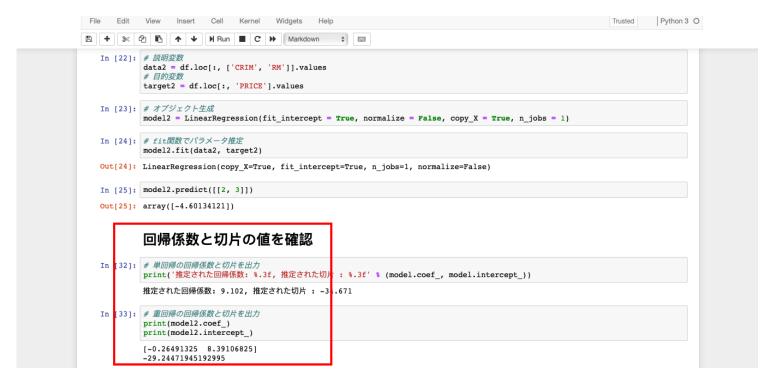
centers[k] = np.mean(X\_train[index\_k], axis=0)
# 収束判定
if np.allclose(prev\_centers, centers): ...2つの配列の全ての要素が完全に一致
break

# 「第7章:サポートベクターマシーン」

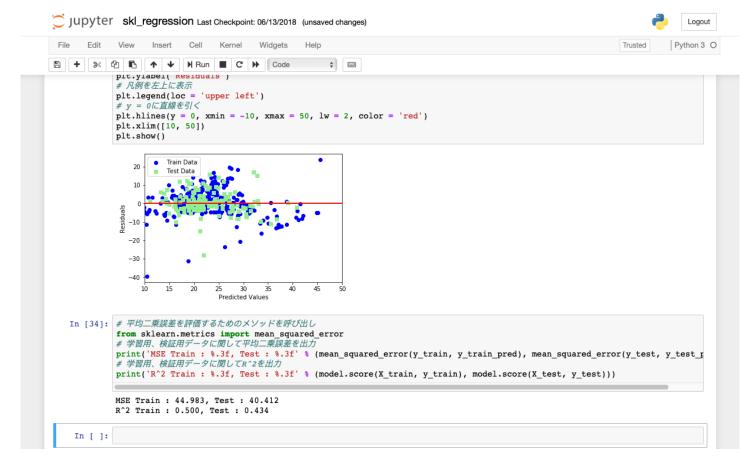
- ・教師あり学習、分類にも回帰にも使用
- ・決定境界線で正負の2値分類を行う。マージンが最も遠くなる境界線を決定する
- ・境界線に近いデータ(サポートベクター)のみが学習に使われる
- ・ソフトマージンSVM 綺麗にデータを分類できないとき、誤差を許容する。誤差にペナルティを付与 ペナルティの値が小さいときはより誤差を許容、大きい時は誤差を許容しない
- ・カーネルトリック 複雑な非線形回帰をするときに使用。複雑な空間を特異空間に変換し線形分離できる



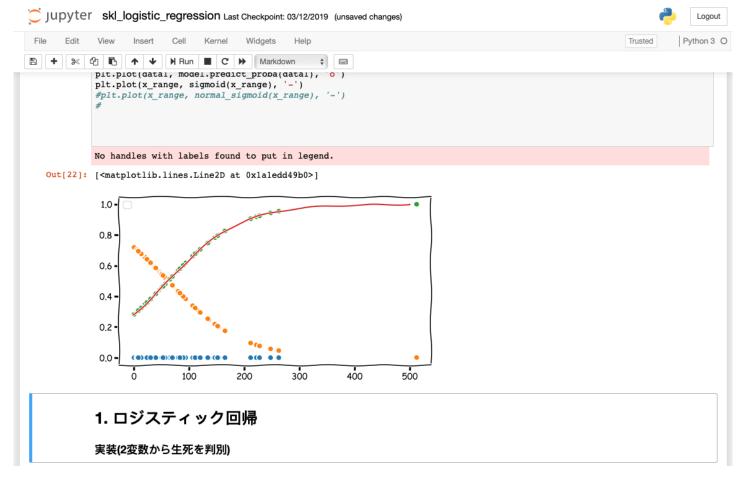
線形単回帰



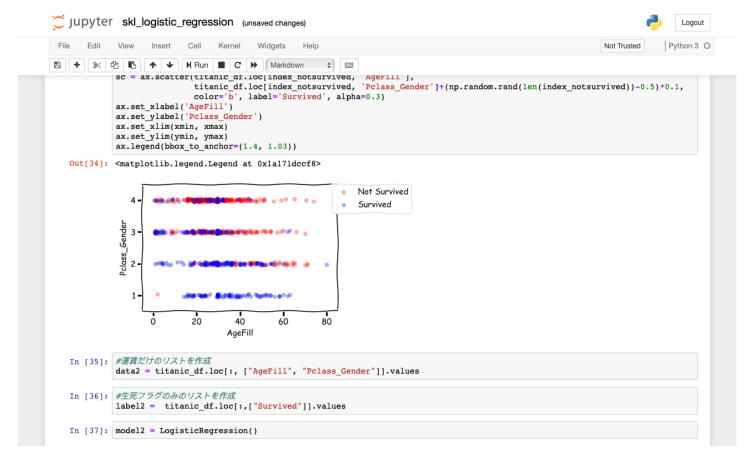
線形重回帰



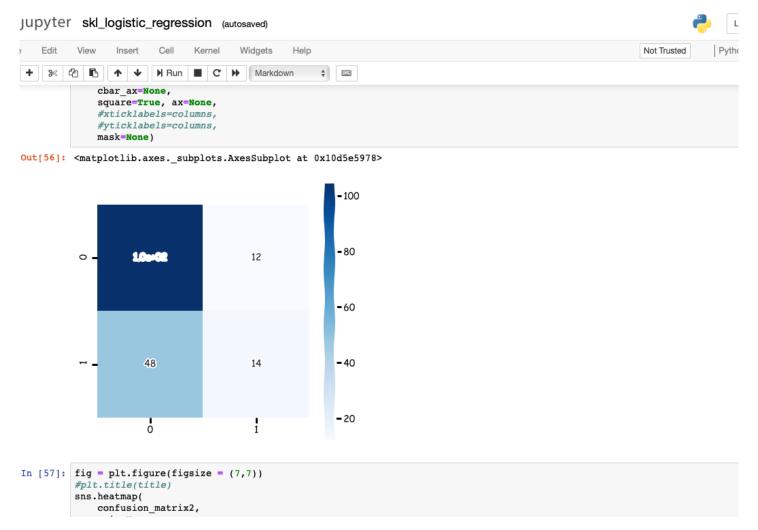
線形回帰 検証

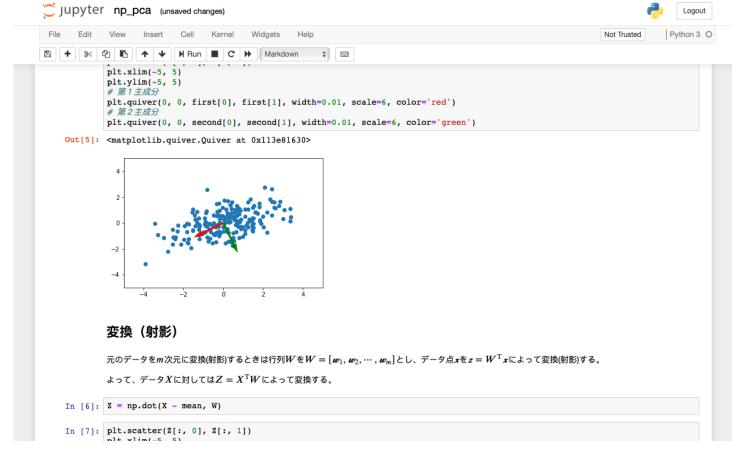


ロジスティック回帰

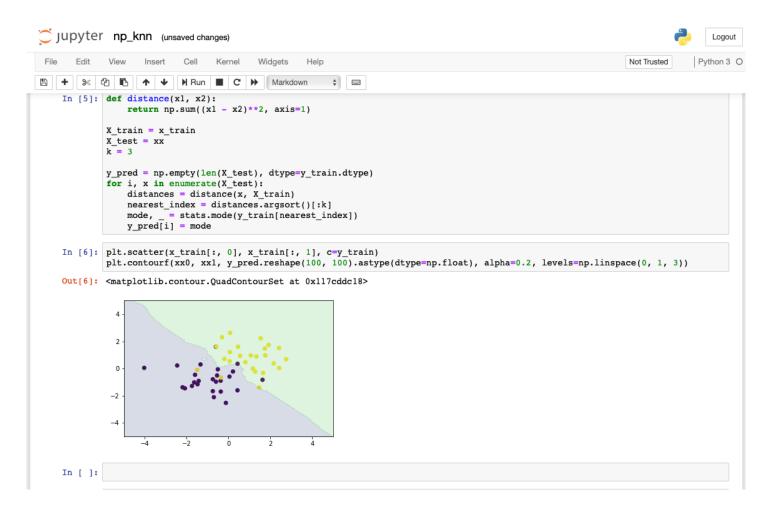


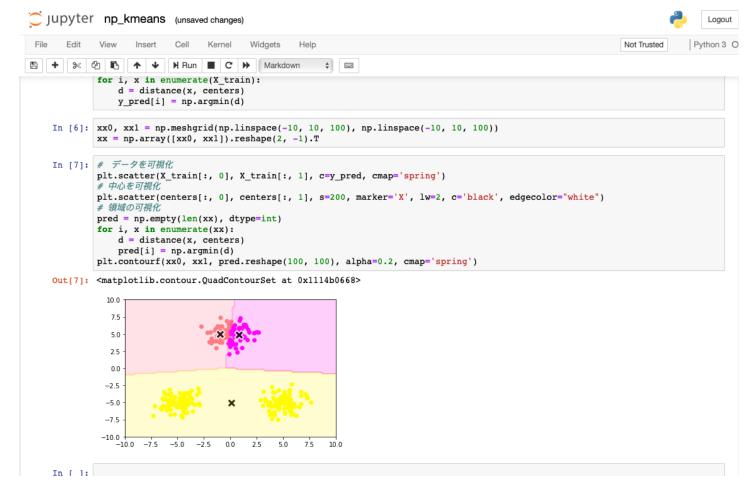
ロジスティック回帰





## 主成分分析





K平均法